
君の笑顔はボクのもの

新藤光太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君の笑顔はボクのもの

【Nコード】

N7987T

【作者名】

新藤光太

【あらすじ】

ボクの心が侵略されていく。

「……ねえ」

カラスが鳴き始めた夕暮れ時。赤い日差しを浴びて、実物のボクよりも長い影が、隣にいる彼女とくっつき合う。

実際にはボクと彼女の間は、一人分空いている。なのに主人を差し置いていちゃいちゃし始めるとは、なんとも不届き千万な輩だ。

「ねえってば！」

「うん？」

隣にいる彼女の黒髪は、夕焼けによつて赤に着色されていた。

逆光のせいでいつもより深い黒に見える瞳は、ボクを別世界に引きずり込もうとしているかのようだ。

「さつきから生返事ばかり！ちゃんと私の話を聞いている！？」

「聞いているよ。カラスの人が事件に巻き込まれた話題でしょ？大丈夫だから、君の意見の続きを聞かせて欲しいかな」

「そう？ならいいんだけど。私の推測ではね、連続殺人犯の正体は、五組にいる仲田くんだと思っただよね」

一緒に下校している彼女とは、一ヶ月ほど前に付き合い始めた。

理由を訊いてみても、「秘密」という言葉と笑顔で誤魔化されてしまう。

反対に、ボクが彼女の告白を受け入れた理由は分かり切っているので、隠す気にもならない。

今年の四月に同じクラスになってから、その大人し目な容姿とは真逆の、元気に動き回る姿に驚かされ、明るい笑い声に驚愕させられ、そして太陽のような暖かい笑みに魅了された。

「へえ、それまたどうして」

「理由？うーん……秘密なのだ」

赤光に彩られたその笑みは、いつもとは違った趣を発し、知り尽くしたと思いきや、こんでいた笑顔の新たな一面をボクに見せてくれた。

「出た、君お得意の秘密。便利な言葉だね」

「へへへへ」

その理由くらい、ボクにだって分かるけどね。

影が先導する道を歩き、交差点に出た。

「私はこつちだから。じゃあね」

「うん、また明日」

彼女は手をぶんぶん振りながら走り去って行く。ボクは小さく蝶の羽のように優雅に手を左右に振る。……冗談だけど。

一人になった帰り道。交差点を右に曲がり、少し真っ直ぐ歩いて、左に曲がり、人気のない道を歩く。

ビルとビルの間に出た峡谷は、今、流行りの殺人事件の被害者が放置されても気付かれにくいほど薄暗く、人の心を不安定にさせる。

壁に沿うように置かれている無数のゴミ箱を避けて歩きながら、

ボクは学校での出来事を思い出した。

ボクの彼女は、学校では人気者だ。

明るく活発で、性格も悪くない。

裏表のない、走り出した猪のように一直線の性格をしているので、とても分かりやすく男女共に人気だ。

ボクは彼女とよく一緒にいるので、自然と彼女の友達とも仲が良くなった。

しかし……なんでだろう。

彼女がボク以外の人間に、あの笑顔を向けると……胸の内にある小さな殺人鬼が再び目覚めるような、そんな錯覚に陥った。いや、錯覚じゃないのかもしれない。

久方ぶりに顔を見せた、感情の奥深くに潜む冷酷な奴のせいだ、ボクの心は果てしなく荒んでゆく。

どうでもいい、で一蹴できないのがなんとも困るのだが。

……もう一回くらい、こいつを表に出してもいいのかもしれない。そうすればどうなるか、なんていう事は1+1が2になることぐ

らい、考えなくても分かることなただけ。
……今は考えたくないや。家に帰ろう。

深夜。

別の言い方をすれば、草木も眠る丑三つ時。ちょっとおかしな人なら、神社の境内に行つて、藁人形に釘を打ちつける時間帯である。

そして、ボクの目に映っているもの。それは、小さな汚い箱に折りたたまれて入れられている死体だった。わーお。

ここは夕方に通つたビルとビルの間にある細い道。
趣味である深夜徘徊を行つていたところ、ゴミ箱の蓋からなにかがみ出しているのを見つけた。

だらんと。力無く外に飛び出ているなにかが気になって、ボクは蓋を開けてみたんだ。

そしたら、目をくりぬかれ、鼻を削ぎ落され、唇はなにかで焼かれたような跡がある女性（元）を発見。

わーお。

「……ふむ」

とりあえず、蓋についた自分の指紋を全て拭き取り、袖で手を覆い隠して天蓋を閉じる。

ボクはなにも見なかったのである。

ささつ、誰かに見つかる前に帰ろう、かーえろつ。

で、その二日後。

彼女が殺されていた。

第一発見者はボク。趣味の深夜徘徊を懲りもせずに行つていた所、山の麓にある小さな公園内の滑り台に彼女は横たわっていた。

着衣に乱れはなく、目立った外傷もない。それもそのはず。検死の結果、体内から毒が発見されたのだ。

発見した時に彼女の顔を見てみたけど、苦しんだ様子はなかった。

一瞬で死ぬような猛毒でもあるのだろうか。

ちなみに、これが、彼女の事件を扱ったニュースである。

『山の麓にある公園にて、首無し死体が発見されました。犯人は毒殺した後、首を切断したもよう』

そして犯人はすぐに捕まった。それはボク。もちろん、嘘だけど。

真犯人は、彼女が怪しいと言っていた五組の仲田だった。

理由は、中学時代に巻き込まれた犯罪の影響。犯罪の被害者は、そのせいで自らも罪を犯す確率が上がるのだとか。

仲田は心が弱かったからね。ボクはまだ大丈夫だけど。

閑話休題。

彼女の死体を発見した時、ボクは全く取り乱さなかった。

それどころか、笑ってさえいた。

それは彼女の葬儀が行われて、クラスのみんなが泣いている時も同様だった。

ボクとしては、もはや当たり前なのだが、涙一つ出なかったし、悲しいという感情さえ芽生えなかった。

そんなボクにみんなは、「泣いてもいいんだよ？」とか慰めの言葉をかけてきた。

我慢しているとも思われていたのだろうか。

そんな感覚、とつくに麻痺しているっていうのに。

仲田は、彼女を殺した事は認めしたが、首を斬ったという事実是否認しているという。

観念して、罪を被ってくれよ。犯人はお前なんだから。

彼女の葬儀が終わり、ボクは家に帰った。

そこでも叔父夫婦から色々と慰めの言葉を頂戴したが、どうでもよかった。あたりさわりのない返答をして、二階にある自室に上がる。

エアコンを最低の温度に合わせて機動させていたので、部屋に入るとヒンヤリとした空気がボクの肌を撫でた。

窓際にある勉強机に座り、付属されていた少し大きい引き出しの一番下を開ける。

「ただいま」

そこにはドライアイスを入れており、中はかなりの低温に保たれている。

そして、氷の枕に頭部を埋めているのは彼女だった。

首から下はない。

頭部だけ。

ボクは彼女の死体を見つけると一旦、家に帰つてのこぎりを持ってきて、切断した。血等が噴き出しても、それは仲田のせいにするばいいのだから、気にしなかった。

頭部だけを持ち帰ってきたボクは、叔母が溜めているドライアイスを拝借して、この引き出しを棺桶にしたのだ。

彼女は安らかに眠っている。

顔は笑顔に固定しておいた。

「……ふふっ」

これで。

君の笑顔はボクだけのもの。

(後書き)

暇だったので思いついた文をそのまま投稿してみました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7987t/>

君の笑顔はボクのもの

2011年6月4日00時25分発行